清談常磐色香（せいだんときわのいろか）

柳亭種彦閲
厚田笠亭作

三

へ13
3583
3

門へ13
號 3583
巻 3

早稲田大學圖書館
35. 2. 2

常磐色香三之巻 一名本朝奈何天

江戸柳亭種彦閲　厚田笠亭仙果戯作

ひとかのよ

藤波一角といふ醫師ありけり。五条の橋の東大谷ちろきゞ邊小さとそこそろ。素問霊樞の素讀ぶ吃とぐちあて。扁鵲仲景が古きやらん東垣薛己が近きやらんも辨へもらぶ康頼を醫者といちぶ虚さとて信ぶまゞき

程の文育あるゑどロさきさん匙ざきさへ怪しく廻りて。
上手よ中へかぞへこまれ。乗物の屋根塵つもらぐ玄
關の戸閉るひまなく。十月橋子のいろむをりもそのの
葉れ緑の常葉小栄え。年久しく流行てへと福有の身
とゐなりり此一角夫婦とし老る迫疱瘡せぐ子も
二十をこあるまで。數痘も患へぐそをとろおりひつき
てかの又昔よりつゝ入へる法ありて。予ぐ家孫真人
より直傳の奇藥あり。此仙丹を服する小兒ハ痘疹の

二尼をうけず。こゝを五痘驚風の根を斷ち。胎毒を清
く除き去るゑ仙人の加護厚きをとしてよりきり柳天ろ
賜へる人体親の生つけゆへる肌膚を蛮國の邪神の為
小聊ゆも疵はけらもんろ口惜く歎ろへしきいろ
よ非ぐやいさんや難治の症ゆて命と失ふ輩おりく。
呼々小哀哭の聲を發るかあまりよいへしいきべ。
此度賣藥として世小公ゑ。此藥の神功疑べからぬ證
故ゑわゞ家累世この病ごうけぐ顔小痕ちのきふく

あり申べし〜万ふ一宿業のあらはしむる所ふて傳染
さるる吉ありとも必かるうて過ちあらしびしうそうふ真人
を信仰して用ひ申べいふ所違ひ過料を出さんちどて此
病流行せし折へ金地ふ青貝もて文字をきたり出したる大
招牌うけて格子れ内の闇きも厭ハど長々しきうふ札出
して賣弘めりさる程ふ買ふ人多く服ちく驗有るも
少かりしかりもく。そこぐぐの謝義うけるぎうよき事
重なりり。二人の子ありり兄ハ幼より長崎へ遊學

みつろへして家ふをうぐ次ハ女ふて於光といひ此於光
十むりの時いうふせん疱瘡甚重くそづらひりて世ふ
あらしまるば藥かふ人も絶へよからぬ評判立て活業の
妨ふもなりなんをきびしく隱して密ふ尾張の津嶋
親類ありて便りまぐ天王の御社へ大願をたく御守
札をごこひうけぐで痕のつらぬやうにと祈けるぐる。
かりく命を繋げるのみふて五體殘るところなくびるがの
こ深の如くぐぶくと凹く昔の形變果てかき撫ていく

をしぶさやうなる前髪鬢のもしぬけてぴと醜き女となり
ぬ不便ふかあまとぐ都ふおきてはぴるだるとかくくとも。
遂ふさとられ家の災をなすべ〜ぞくく遠き國へ
やりてんとてがの尾張の親類のもとへ下〜預けおき
〜を此尾張人情なきものふて於光を奉公人も同〜
やうふあつうひ聊心ふ叶ふだ打躑躅ぞとるふ〜聞へ
りまじ母ハ苦ふやうてあれ子の醜くなるとぬるも普通
の藥さうとともせど利の速なるん支を圖ふてさもなき

ものふて人を欺き不義の財をあつめふ罰ふてあそ
猶さもうとまるぞ〜てむぐくも田舎へ追下〜かちきめ
を見せるふ君ハ鬼ろ人かとて明暮つぶやきなげき果へ
病さなりて長く病て死ふれり最期の憤骨ふ透アとく。
一角前非を悔ひぴそぎて於光さとりもぐ〜年来
つまなるり〜を侘びい〜ゑりぬ其のち於横ぐのふ
女をめとりぬ此於横ぴくく〜ふぢけうる上心なるぐ〜
こくて夫を尻ふおきれり。これぐつまを子一人ありぞなち

人々の心さるやすくお文へるゝ。お文ハお光ハ歳一つまゝとゝ
ゝまゝび娘と称ぶ顔よきうへ少〻文才もあまゝびお横ハ小
野小町と紫式部をひとつハ合せるやうに覚へゝづから
よろこび人ハ誘ひ手ハを長て大夏ゞり背をゝぞく
かハゆがるふつけてお光をみくゝ笑いぐ〻ろハそる事。
目も當られぬゝ。ともをまゝびハゝ〻つめりゝふくて不骨なる
を罵り唇めの〻ゝ洗まゝびお文さへゝき夏ハ〻て舌を出〻
指さゝ〻て嘲り嘆ひあゝとゝハ名を頼て肩腰さと

らせ湯さうせ飯盛せさこ〻も違へぐらちさいるゝ。人
さもおゝハゞ悪女のかゝちつくるを見ぐゝ〻きりのとて。
化粧を嫌ふをあり て或時ハこちハ化粧をする夏上手
なまゝびおまへの顔見たゞへるゞりハ塗ってまるらせん
さゝく白粉猪口もちてむろへゝやゝ〻へとゝぐるゝぐ
てがまゝ〻きゝ心ろる婦ゞいるまくハるうへとて力ゝぎり。
お光ゞ顔押あハむけて壁をぬるゞとくぬるとうづめ眉けハ
〻〻く画き紅ひかうせ役者〻〻ゞ手うちゝてきさるゞ

めしそのまくあらうんとさしまべおきこんふらまへせつ
かくお文が手せつてして作りて物をおきさんとわぎりもち
ぶたぐしふ誠のあひおらで賤しきものく手でぬらしさ。
きこあぐりゆびぐ是非もあしお文おいもうとぼさるゆふ
おらび申せと袴ちかけられるどて洗ゆそしひべきおう
げふそうつてしきを女ふありてひとておひてるぐはつくり。
おきざりしつ。部屋ふ入しもいこそしかりきかくせられ
てゆかりそえんゆもあらがらぐ母を母としあひをあひと

しそうやまいつうひるがおまうつうきあふのこあひ
りをさまべ中くふかやうあるうき身の世ふたち交ゆる
ゆへ人ゆふくこうをもくるしきどうしに尼ふありて山ふ
いらべまくしき中のかん苦ものゆを醜女のたぢもかくる
べし。剃髪せばやさてさいえをゆべ。花のちるを毋あ落
る。世のとうおきを観じたる上昔のこいひ。方丈の庵室百
八の数珠。衣鉢の外ふおしきのあしがるさせるへとを
ひりれば。一角いふあらん。出家の望もさる吉なるらへふ

さるべき所へかごづらん。其時ハ。法師の志願ひすらるべ〜。今ちべ〜くろへくるゑ。自道心堅固ゑ。そも深窓ゑひそまりをるとハたゞひて。菜摘水汲ゑ。身がらもかろちり。かつ。人け遠き庵ち用心ひるくて。若き女の山住ハえろうぬ火を得。又よろぬ評判をもらくるものゑ。まづ嫁し。子をを殺け。女の一世を過して後。ともかくもとるぞよきぞて。許さゞゑ。お横ハぶくさげゑ見やり。お光が尼ふゑらんとゑふゑ。こちらへのつらあてゑ。おのゞ心のひゞゑ

みて。こちを継母根性とうとゑ。うゑ侮り軽しゑ。あ藝能ちつけ方ちゞとさとせべ。ひゞ不器用ハ棚へあげて責むちうゑ。ゆうゑ。ひあきさちゞとて捨置ハ物ぬふうぎもでけべゑこそ。一針縫てハ居睡ゑし。一針めゑハ針をゑる巾著ッもえつゑらで。ちゞ水くさゝれやうゑ腹ぶちゞ。ぞしゑまゞ責るとうちむ。その音儘の心がちゞうちとのゝれゑ。こちやお文ぶうやまハまゞゑ。ちゞらるゑを姑ゑて坊王ゑ。王ゑちらんちゞとくハ二人を坊王

み〜て追出さんの謎あるべ〜いなとはいへど早刹なへ
とかーらもとお光が胸ふ突つけ。夫も夫く常ふあのひが
ものとかひてこちをあーさまふ誹つきふ故ふ必つけあり
とる過言をもいひ出けく佛性ん継〜き中何もいとうふ
こらへてもまど自然の罰の用心せよと口ふまかせて
ワめきちらさまなまあろの支いひ出て更ふ又袖
をぶるもあんまこ一角ハとふかくふ早く縁つろせまは
しく所々きくあらするふ相應ある方をきふ〜も

あ〜神ど七八分相談整ひてい顔のよろらぬふ奥さ
めて変改まもべ〜のでやつりあんぬ身がらうりやも。
醜婦兼知のむこあらば粧奩の外二百金をそへん。
その媒せん人ふえ五十両の媒錢を與へんと心腹の
ものふかくらひろるを。大二郎もきくありてみろう。
此こび鴻太郎が藤波氏が娘を媒〜てみくとのひ
こ〜ろ〜書ふまく子本の子とかくべき所を本北
子の方きくとやうふーときく〜ろば其まく妹娘を

かきてしをあやまりとあらく念もおさびいろふもし
て。嫌おわせ。数多の財を得まゝ。その上こちの女と
目がゝる報ひ。醜女をあてがひて笑ふべゝとて。あくる日藤
波ぐりとく赴くんとするをり。お文より書おこしかの
堂上方の御家臣。某左近への縁組もたや脱ぬべうも
あらぬ結納いたして後八主ある女ふありて。欠落をと
も。求まで吉又へいゝかはゞ。一日も早く盗ゝ出し
ゆくとせきてふせる書のざまゝ。犬二郎。この頃うん

がゝ得さる一条あるべさゝも驚かぬ心得ゆ。今宵
忍びてまゐりこまろふかゝらひ申べゝと返事。
その夜ふくるをまちて。路次口へ出きもれば。
あらぐちの下女まち居て手をとりていまどいつりの
所ふをゑおきやくあぐらくまゝせゝまどあくびひ
あつ。打ちらぐちて。人ゝもあり。ふるかあ住部
のとうめくとやさら障子あけてお文入来つるげ
きろ。ひとう極ゝよのむくひふいらとかるき文や

おぼせとぶこくしていふけさの風俗見てより物もの
どへとゐらびいふまゐり行支かとこもよとあられど。
いろさへ青うまりぬるふさてはあちらへ行ゆふまり嬉
しきふにこくもるのうと例のひぞまバ猶みくるこさ
やうふどちふ出らるこてへとてこくもチヨボふ合者て。
そうとや聞えまうせぬ何どうと時代るせうふゆらゆべ
あらびぐ何もさうおきさ欠落へ先當分延しくよりしけき
父上の仰ふへおことなきてくまぬさまるるるどど明後日へ

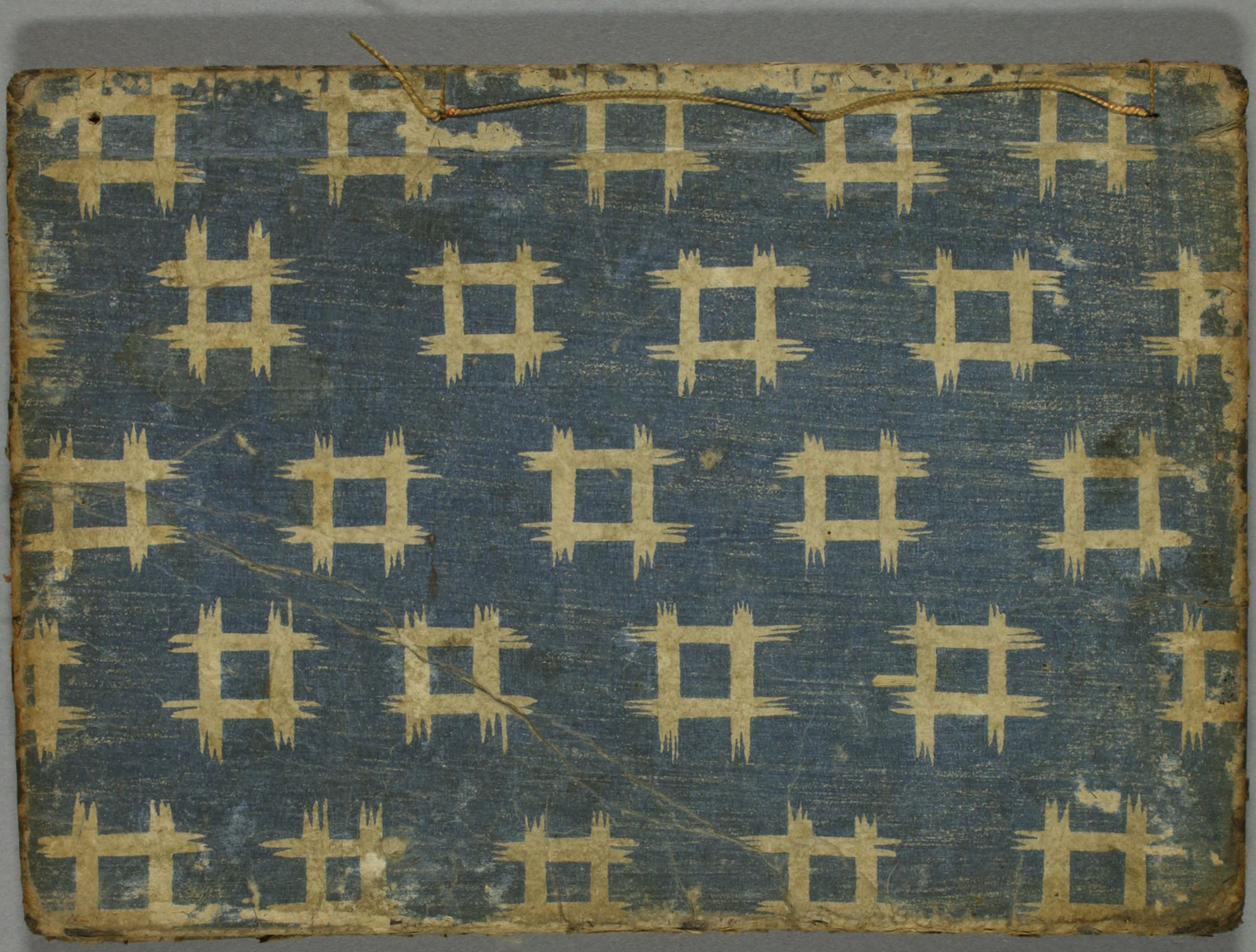
土日やるる左近方へ納得の趣を告遣るべし。考う心得よ
とゆやをいいさびそそと故あの如つげ申せしと宵ふ
人の来てむこるる男此ゆどより重き病を煩ひて。
けふふてへ命のゆどかぼつぐるしよ沿ひたりやも。
二月三月ふてへ健ふへうちじとゆるるとき母上のれさ
まふへ今しも案ぜるることるかど死ゆべとれぎるる直る
とゆ中ごるるこもうる虚ふ乗てなんでも此縁断ひて。
思ふ男ふ添ひべし必逃も走りもまるる。人目ゆのびて

時をまち、另一八又世ふこうるおとのさまひ〜ぐれん
仰ふいへびや、といそくもそびそまとハ真がさうとも
でおくそう賃をぞ發〜こうとゝさまどこうぶ智慧の程
をも聞たまへといひぐ欠落とハ勇てれ契約なぐら。
つらく遠く慮るふいとゝき君をえべ〜みてもひぶせき
あこうふかゝ〜おき追手をうけ食儀せうまで天の高き
ふ首を縮め地の曠きふ身をまぼ名。志のびおちんを拙
ヒざ加のむさ〜野れ妻竜り芥川の鬼一口おしくハ半途

ふ〜七障出来て本望八遂がるく人をそこるハ身を亡
〜或ハあちふ世を見限て対の衣裳ふつゐの帯二世を
このゝれ無分別後の後まで讀うりの上下そろひて十六文
ぬけ〜こ獄子とうこうへるぢ〜そまとうハ謀畧ふて先方
より緑を断せ後天下をとて女夫ふゐうるくあうこそ
あらまほ〜ぞまと抗を砕〜かひ有て陣平そこのけ
張良も沓を捧て跳足て逃べき神出鬼没の妙策を得
つそハ先君下女とかの呆児つまてごろうそ寂しき

作者云犬二郎が詭計をうけるハ二重夢をとくぶ〳〵かゝるがゆゑに画ゑもゆゑのやうなる圖をうゝせう

邊へゆき夕方までぶらつきるふ。そこで二役二番敵頬ろ
ふろ〻朱鞘の大小物の陰ふひそ〻どうかいふきろろけふ
飛出て無二無三ふ君を引かづき。そのまく谷間へ入る下
女ハいひ合せろろ支ゑをべそでゆゑき所を探ひどうも
行方ぶゑをぬとゑ〻〻〻歸るところふて道具廻り藤
波氏の館とゑる四方へ手くばり〻て尋れど猶ゑをず
そこでこちら曉方ふ君の手を引てつをゆき人々を
退ぞかせ父は母のまくふをろゑ拙者物より歸る道

そんぢよそこの所ふて。五六人のあぶをとの御寮人様
とらくて思ふまくふ慰〻このお子ハ不便や氣絶〻て倒
れ居ゆゑを猶取かこ〻ていらひゆ〻ろ。見るとうそろと
思ひぢぐら怒心頭を貫きゆゑらやようくゆかくハ辱しめ
奉ア〻〻〻息の根とゑてこれんぢこと其儘一人を投除ぢべ
殘ア四人ぶ一同ふ〻〻つくをこともせぢ身をゑづむれべ
あ〻まゑこのこゑ。ころり目から出る火ち稲妻ぐげ
ろふ水の月猿臂を延〻てゆぐるとつろゑべひろをゑぐら

み両方よりうち挟こてかくるハ蟹をらんぷけらをて横ふんふて
ゆくぶりゆどうもて胸ぐらをぐろ〳〵方から涙ぐ〳〵痛ん
あるせと俺るもありぶさあぐら胡蝶のたてくらきふ敵ハくるく
さんぐりうがへつむ遂ふちやつらぐ腰のつぐひもぐちぬき
て敵をとりつぶさてさあぐふ介抱〳〵川水結んで口からら
口命をとるすけ糸せうとぐのり地ふて物語らべ頬
ゆ〳〵き者とおぼもべ〳〵君ハが〳〵らハちら〳〵髪ぎゆめ
をとうで〳〵をとろぐべ〳〵埒もあき出立ふて耻〳〵かちあど